
飛鳥奈良時代における写経生産の経済

——日本出版経済前史——

箕 輪 成 男

目 次

- 1 渡来文化
- 2 出版者
- 3 市 場——人口・リテラシー・知的関心・図書館
- 4 製 品
- 5 著 者
- 6 複製過程
- 7 価格・コスト，賃金
- 8 流 通
- 9 比較出版経済
- 10 あとがき

1 渡 来 文 化

わが国土における文字の使用のはじまりが5世紀の頃であることについては考古学的な証拠¹⁾がある。これまでの無文字国が時間と空間の制約を超えて正確な情報の伝達を可能とする文字を手にしたことの意味は大きい。しかもそこでは漢字の訓読化²⁾がはじまっている。こうした文字が大陸とくに朝鮮からの渡来人によってもたらされたことはいうまでもない。渡来人たちは4—

5世紀にはまた文字を記すための書写材料として紙をもたらし、製紙の技術を伝えたと考えられる³⁾。文字を書くことはこうして5—6世紀には行われたが、それは主として外交上の信書、記帳とか登記の目的であり、その担当者は長い間大陸とくに朝鮮系渡来人の史官であった。

G・B・サンソムは文字が伝わった後も、紀元700年に至る2世紀間、日本ではほとんど著作が行われず、わずかに聖徳太子の十七条憲法と三経義疏、近江令などが知られているすべてであり、このように学問の進歩が驚くほど遅れたのは、国内の政治的混乱から大学制度がしっかり根着かなかったためであるとしている⁴⁾。かな文字成立以前のこの段階では、日本語の表記自体が容易でなかったことにも大きな原因があったろう。

5世紀に文字が受容されると共に儒教についての知識もいくらかはこの国の支配者層に伝えられていたと思われるが、6世紀に入ると史実はよりはっきりしてくる。513年に段楊爾^{だんように}、その3年後には漢高安茂^{あやのこうあんも}が百済から大和古代王権へ派遣されて来る。彼らは交替で儒教教典の講義をしている。さらに、易博士、暦博士、医博士なども百済から派遣された。こうした動きを「文化の交流」と呼ぶのは適當ではない。むしろ文明というものが先進地帯から後発地帯へと直流する好例と思われる。そして先進技術の伝播が、半島諸国と大和古代王権との政治的対応関係の中でそのひとつの要素として用いられたことはいうまでもない⁵⁾。

言いかえれば、文明の浸透というものは、先進国が力ずくで行うか（侵略、植民地化）後発国が政治的な意図によって輸入することによって起るのであり、真空地帯に空気が入りこむように、無意識下に中立的に行われるのではないということである。仏教の伝来も同様、わが王権との同盟関係強化という百済の外交政策の一環として行われた。

政治哲学としての儒教を、実践に駆使するほど現実の政治が成熟していなかったこの国にむしろ有効なのは呪術としての宗教であり、事実仏教は呪術として受容されたのであった。

いかなる思想も、全く中立的に真空状態の中で移植されることはない。それが受容されるのは、受容する側にとって都合がよいからであり、また受容されたものは受容者の都合のよいように変容を受けるのが普通である。

明治維新に際して、西洋の科学技術思想や社会思想が受け入れられたのは、日本の近代化にとって都合がよかったからである。しかもそれはすぐれて日本的な屈折を受けつつ受容されたのである。

仏教も同じである。それがまだ脆弱な基盤の上にあった王権——王朝の権力補強に役立ったから積極的に受け入れられたのであり、迎え入れるについては、仏教は王朝に都合のよいように解釈されたのである。こうして奈良時代の仏教は、釈迦の思想と全く異質な形で展開することになった。仏教受容の政治的背景については、岡田精司氏の論文が詳しい。⁶⁾氏のとくところはこうである。

「はじめ仏教は、国家の統制の下で、国家に呪術奉仕を果すものとして、国家に従属する形で受入れられた。外来の霊力・威力を国家支配の目的に利用するため、仏教は蕃神、仏神、他神などと呼ばれたが、要するに国家はその権力強化のために、8世紀以前においては、仏教をもそうした霊力のひとつとして利用しようとしたのである。

農耕儀礼と祖霊崇拜に発する日本の固有信仰としてのカミの世界の素朴さに対し、高度な教義と教団組織をもつ仏教を取りこむには国家による統制が必要であったから、飛鳥時代の大和王権は国営によって官大寺を創建し(655年川原寺創建以来奈良時代を通じて)、僧尼令(701年)によって僧尼の統制をはかったのである。しかし、律令体制の矛盾が激化し、社会不穏が拡大すると、官寺仏教やあるいは共同体的信仰を前提とした従来の神祇信仰では、救済されることのない、社会の底辺に向かって、私度僧の布教活動が盛んになる。律令体制側はそうした官寺の枠外の私度僧の活動に対して、統制、弾圧をしばしばはかったが、奈良時代のなかば以後藤原氏の進出と共に仏教の国教化が進行し、行基に代表される民間仏教の私度僧による活動もまた国

家仏教の中に取りこまれるようになる。

藤原氏以前の皇親政治が、神祇を中心とする宗教統制政策をとり、仏教は神祇信仰の下位に立つ、国家統制下の呪術サービスと位置づけられてきたのに対し、皇親政治に対立する藤原氏は、皇親政治の神祇中心主義を否定し、それに代わるものとして仏教による鎮護国家を唱道した。すなわち、藤原氏の進出と共に、神仏の位置の逆転が起こった」というのが、岡田氏の説である。ここで藤原氏が金達寿氏の暗示するように、朝鮮渡来人の有力豪族であったとすれば、一層その意味が明瞭となる⁷⁾。

奈良王朝は、新宗教思想としての仏教を、国家権力強化の手段として国家の統制の下に保護し、寺院、僧侶、経典——場所と人と教義——の整備、掌握に努力した。経典の整備は、国家による写経生産の形でなされたが、それは仏教思想の伝播という情報活動である以前に、むしろ写経行為そのものが一種の呪術的意味を持っていたことを忘れてはなるまい。ともあれ政府の命令によって、あるいは政府の直営事業として、仏典は、奈良時代を通じ大量に生産されたのであった。

奈良時代は、したがって先ず何よりも「写経の時代」であった。

注

- 1) 上田正昭『帰化人』中央公論社、1965年、72頁。
- 2) 同上、76頁。
- 3) 町田誠之『和紙と日本人の二千年』PHP 出版、1983年、16頁。
- 4) G・B・サンソム（福井利吉郎訳）『日本文化史』東京創元社、1976年、70頁。

サンソムは682年に編集された古事記によって、それまで口承されてきたものがはじめて文字化されたことを、著作活動のおくれの例証としている。

- 5) 上田正昭 前掲書、115頁。
- 6) 岡田精司「古代国家と宗教」『講座日本史 1』東京大学出版会、1970年、

274-275頁。

- 7) 金達寿『日本の中の朝鮮文化2』講談社、1972年、122-125頁。

藤原氏の出身氏族である中臣氏の根拠地は現在の高槻市、茨木市辺りであり、茨木の安威古墳群の一部と考えられる安武山古墳の被葬者はおおむね藤原鎌足に比定されている。この古墳の出土品が朝鮮渡来のものであると考えられることから、藤原氏は恐らく渡来人の系統であろうと金氏は暗示している。古墳時代における先進文明、先進技術の所有者は渡来人の人々であり、先進技術を持つ者が、持たぬ者に対して社会的に優位に立つのは当然だから古墳時代の日本において有力だった氏族は、一応、渡来人系と考える方が科学的だろう。まだ国家を形成する以前のこうした時代について、明治以後のナショナリズムに基づく史観で、半島との関係を歪曲して考えることが、日本の古代史を科学的に理解することを妨げている。

2 出版者

飛鳥、奈良時代における写本生産の中心が仏典にあったことは、上記の通りだが、それに加えて儒教、医学、暦学、文学などの作品の写本が小規模ながら生産されたことは、言うまでもない。写本生産という作業が、なんら特別の大施設を必要とせず、識字者はいつでも生産者に転化するという条件にあったから、それらの特殊な知識を必要とする人々が、必要な文献を書写することは、自然に行われたであろう¹⁾。しかしそれらはむしろ小規模かつ孤立的な作業としてすすめられたのであり、社会的な広がりをもった出版（複製・頒布）活動ではなかった。われわれにとって最大の関心事は、飛鳥、奈良時代を象徴する仏典の製作である。その他の経典については、補足的に触れることにしよう。

さて出版という行為は、本来多数の読者（利用者）に向けて複製した著作を供給する作業だから、それが成立するためには、読者の存在、いいかえれば市場——マーケット——の存在が前提である。だから出版の経済史は、市

場の確認からはじめるのが常道だが、出版前史の飛鳥、奈良時代においては、多少事情を異にしている。ここでの出版（複製・頒布）は市場の需要というよりは、むしろ王権、王朝側の意思によって実施されたと考えられるからである。したがって、本稿においては考察は先ず、著作の複製、頒布行為の発起者である政治権力側の分析に向けられねばならない。

飛鳥、奈良時代の出版者が政治権力側であったとしても、その政治権力と出版活動はどのような推移を示しているのだろうか。

寿岳文章教授の『日本の紙』によれば、天武元年（673年）川原寺ではじめて一切経書写のことがあって以来、約100年間に一切経の書写は18回行われ、22部が生み出されている。²⁾これを10年ごとの回数と部数でみると、表1のようになる。

表 1

年代	回数	延部数	出 来 事
670 	1	1	川原寺一切経
710	1	1	平城遷都
720	1	1	
730	1	1	藤原氏進出
740	5	5	大仏鑄造 国分寺建立
750	2	2	
760	4	4	
770	3	7	百万塔陀羅尼経
	18	22	

また大屋徳城氏は、奈良時代の写経を次の通り三期に分け、中期が最盛期であったとしている。³⁾

(1) 奈良時代初期 元明・元正 14年間

(710—724)

(2) 奈良時代中期 聖武・考謙朝の天平勝宝8年まで 33年間

(724—756)

(3) 奈良時代後期 天平宝字元年から光仁朝まで 28年間

(756—784)

大屋氏は写経全般から見て、奈良中期がその全盛期であり、後期はいわば惰性的な時代としているが、この観察は前記一切経書写の歴史とも一致している。回数の急増するのが740年代であり、この時こそ大仏の鑄造、全国国分寺、国分尼寺の創建という日本仏教における国家的大事業が一斉に実施された熱狂時代であった。

奈良時代の中期、730年代以後、藤原氏の進出が顕著に見られ、天皇の外戚として権力をふるったこと、それに対して他の諸勢力が対抗的行動を繰り返す、天平文化の花ひらく陰で、陰惨な権謀術数が次々に展開したことは政治史の説くところだが、そうした個々の権力の推移は出版経済史にとって直接関わるところではない。

疑問として浮かぶのは、なぜ仏教（造寺・造像・造経）が国の財政を危うくするほど国家事業の中心に据えられたのか、それはどうして必要であり、またどれほど政治目的にとって有効であったのかということである。

ここで我々は仏教を単なる宗教と見るのではなく、奈良時代の人々が手にした最初の高度な思想体系であり、それだけにそれを護持することは、権力の存在に対する大きな権威づけとなり、補強の役割を果たしたのだと考えるべきだろう。

明治維新以後の近代化過程でセットとして受け入れられた「西洋文明」が近代化を支えるイデオロギー、錦の御旗として極めて効果的であったように、奈良時代の仏教もまた、新しい世界観・新しい人間観を支えてくれる「新文明」として、奈良時代の政治権力にとって有効だったに違いない。国家の財政を危うくしてまで遂行された造寺・造像は決して天皇の仏教帰依といった個人レベルの話ではないはずである。

このことは、6世紀半ばの仏教伝来から飛鳥時代を経ての仏教受容の動き

を見ても明瞭である。中央集権的律令国家の成立以前においては、仏教は思想そのものとして受容された。諸豪族間の権力争いが続いた大化改新以前にあっては、仏教を政治的イデオロギーとして利用する社会的基盤がまだ成立していなかった。6世紀末頃の藤原氏と物部氏の崇仏・排仏の争いは政治権力が外来の新思想を政治的にどう利用するかを決める、いわば前哨戦であった。

以後7世紀末に至る100年以上の期間は、仏教が漸進的に人々に受容された時代であった。それはもっぱら呪術としての性格が強かったが、医療も保障もない古代において、呪術への依存度は、今日では到底想像できないものがあつたのだろう。

そのような、いわば個人レベルの宗教としての仏教が政治と結びつき、強力なイデオロギー的役割を期待されるようになったのが、奈良中期以後であった。そこではおなじ仏教でも、期待される社会的（政治的）役割が異なっていたのである。政治権力の目には、当然唐における仏教隆盛の様子が強くイメージされていた。国家の保護の下に盛大を告げ、鎮護国家の呪的サービスとして、唐朝と一体を成す中国仏教を目の辺りにして帰国した遣唐使の報告によって、仏教を、国家の確立された機構の一部としてとりこむことが、奈良王権の政策として採用されたのである。近代日本が、西洋の思想・科学・技術を西洋近代社会の機構の一環として捉え、そのイミテーション実現に邁進したのと軌を一にしていたのであろう。

ともあれ、奈良写経はこうして奈良時代の中期以降、藤原氏を中心とした国家権力によって、「鎮護国家」という政治的イデオロギー実現の一手段として意図的に推進されたものであった。それが王権にとって、経済的にどのような負担を意味したかは、次第に明らかになろう。

注

- 1) ただし、写経生にはとくに能筆の者が選ばれた。正倉院文書には、写経生

の写字能力をテストした、採用試験の答案が残されている。だから、文字を書ける者が誰でも、プロの写経生になれたわけではない。

2) 寿岳文章『日本の紙』吉川弘文館、1967年、147-149頁。

3) 大屋徳城『写経』仏教考古学講座第8巻、雄山閣、1936年、40-42頁。

3 市場——人口・リテラシー・知的関心・図書館

飛鳥、奈良時代の写経について、通常の意味で市場という用語が当てはまらないことはすでに述べた。写経は主として国家事業であり、官寺の事業であって一般市販を目的としたものではなかったのである。ここでは「市場」を経典に対する社会的需要といった、広い意味で捉えることにしよう。

奈良時代の日本全体の人口は約600万人、奈良の都の人口は約20万人、そのうち中央政府の役人として職制に定められたものの総計は、8117人であったとの沢田吾一氏や直木孝次郎氏の報告がある。¹⁾このほかに、都庁や警視庁職員に当たる、いわば都の地方自治体関係の人々や、官庁に下働きとして徴集されていた人々を加えると、1万人を軽く超える人数の人々が、政府関係者として働いていたといわれる。²⁾

これに加えて、どれだけの人員が地方の国府（国衙）や郡衙に役人として配置されていたのだろうか。青木和夫氏によれば郡衙には郡司の配下として、³⁾書生以下我々に関係の深い造紙手2名をふくむ60名程の人々がいたらしい。当時の全国の郡の数は約500であるから、3万人といった数が出てくるが、それら郡衙の働き手のほとんどすべてが年間60日という雑徭の代わりに徴集、使役される人々であり、その最大の部分が護衛・守衛の任に当たる人々であったから、知識階級は極めて限られたものであったろう。

他方、文字と経典に最も近い所にいたはずの仏教関係を見ると、624年における寺の数は46、僧侶816人、尼569人であるが⁴⁾7世紀末から8世紀前半にかけて、諸豪族による造寺が爆発的に拡大し、700寺に及んだ。僧侶数は747

年には6563人に達している⁵⁾。こうして見てくると、奈良時代においてリテラシーを有し、文書や記録を取扱い、経典を読む能力をもった当時の知識階級は、多くみても1万人ないし2万人程度ということになる。飛鳥時代は当然にそれより少なかったろうから、飛鳥、奈良両時代の文字の世界が、極めて限られたサークル内の出来事であったことを我々はまず認識しなければならない。

しかも第二次遣隨使に同行して派遣された留学生、留学僧、計8人の多くが渡来人であったことに示されるように、飛鳥時代にリテラシーを有したのは、ほとんど渡来人たちであり、彼らを通して在来の日本人は文字と経典を学んだということを忘れるべきでなかろう。

さて、無文字に加えてほとんど無思想状態であった古代日本王権は、渡来人に接し、また渡来人達のもたらした技術と体系的思想を前に、その摂取受容の必要を痛感した。勿論それが権力の維持に効果的である限りにおいてであることは、前項ですでに述べた。百済との間の頻繁な往来や、命がけの遣隨使、遣唐使の派遣はそうした国家的熱望の現れであった。

三次にわたる遣隨使では、延べ10数名、19回企てられた遣唐使では毎回平均20人ほどの学生、学問僧が送られた。これら留学生、留学僧は国費留学生で、経費が多額にかかったし、また留学は往復の危険、異国での生活の困難等、多くの苦難をかかえた命懸けの仕事であったが、貴族の子弟や僧侶のうち、秀才をえりすぐったこれらの人々が、大陸の文明を導入するうえで大きな役割を果たしたことはいうまでもない⁶⁾。

遣唐使節団の規模は、時代が下ると共に次第に大きくなり、500人を超すようになる。そのうち船員や雑役夫、護衛兵が半数以上を占め、知識階級は100人内外であったとされるが、留学生以外のこれらの知識階級もまた大陸の文明を目の辺りにし、とくに唐初の盛大なる時代を体験したのであるから、その受けた知的刺激は極めて大きかったと思われる⁷⁾。

さて、以上で、飛鳥、奈良両時代における一般的な市場のスケールをイメ

ージしてきたのだが、そうした市場、いいかえれば経典利用者の実態に迫るもうひとつのアプローチは、当時における図書（経典）収蔵の状況をとらえることである。後に見るとおり経典が貴重品でほとんど個人的所有を不可能としていたこれらの時代において、それらが収蔵されていた諸機構の実態を探ることは、社会全体としての経典に対する需要のスケールを推測する、有力な手段となるだろう。

幸い日本の古い時代の図書館史については小野則秋氏の詳細、該博な研究がある。⁸⁾ もっとも原史料に制約があるため、その内容は我々の目的、とくに蔵書量の推定という目的のためには、必ずしも十分に応えてくれるわけではないが、飛鳥奈良時代における、官私の蔵書の全体像について、一定の想像を可能としてくれる。いまその所説にもとづいて当時の図書館（文庫）を概括すると、次のとおりである。

(1) 図書寮^{ずしよりょう}

大宝令によって定められた官制の一部として設けられ、日本の歴史編纂の参考とする経籍や仏典の保管と複製を目的とした。いわば国会図書館のような役割をもったもので、書庫と蔵書目録を作ったことが知られているが、蔵書量についての記録はない。図書寮における写本の生産担当者は職員62人、うち写書手20人、造筆10人、製本4人、造墨4人、造紙4人、雑役20人となっている。

(2) 写経所

天平以前は写経所は図書寮の一部として設けられ、諸国の寺に装置する金光明経などの護国経典を写経した。元正天皇の養老6年（722年）には、写経所の作業が写経ブームによって大規模化し、図書寮から分離独立、皇后宮職の管理下に入った。奈良時代最盛期の写経所は、職員392人を擁し、うち208人が写経生（書生）で、それぞれ写す経典の種類・レベルによって専門が分かれていた。仏典のみならず漢籍も写された。写経用原典が常時収蔵されていたのか必要に応じ他の収蔵機関から借出

されたのかは明らかではないが、常時ここを多数の経典が通過したことは明らかである。⁹⁾平安時代に入ると、写経所はふたたび図書寮の管理下に戻る。

(3) 官庁文庫

各官庁は、政策決定、行政判断の参考とするため経籍・記録・報告書等の情報を備えた。

- (イ) 太政官文^{よどの}殿（内閣資料室にあたる文書館） 担当者（史生）11人。
- (ロ) 外記文殿（内閣書記官用資料室にあたる文書館） 担当者10人。
- (ハ) 中務省文庫（宮内省・内務省を兼ねる役所の図書室にあたる） 全国の戸籍、税帳・僧尼名簿等を置く。

(ニ) 天皇御文庫

蔵人所（侍従官府）におかれ、昼と夜の両文庫があった。

- (ホ) 御書所、内御書所、一本御書所 天皇のための一般書籍を所蔵した図書館。
- (ヘ) 冷然院、嵯峨院の文庫 天皇の離宮におかれた文庫。

(4) 学校文庫

(イ) 官 学

671年の近江令にも「学校」の制度が見られるが、701年大宝令によって学校制度ははじめて確立した。中央に貴族子弟の官僚養成のための大学寮がおかれ、儒学を中心に学生400人とされた。地方ではおなじ目的で大国は学生50人、上国40人、中国30人、下国20人と学生数を定め、郡司および庶民の子弟の教育に当たった。これらの学校には図書室が設けられ、学生の学習に用いられた。

(ロ) 私学・私塾

私立の学校としては、有名な空海の綜芸種智院があるが、これは平安時代に属する。奈良時代の末期には私立の学塾として弘文院、文章院、勸学院、学館院、奨学院、淳和院等が、各氏族の貴族子弟のため

の勉強室として設けられたことが知られており、これら私塾は文庫に一定の経籍を蔵書して学生の勉強に資した。例えば弘文院では和気清麿の蔵書をひきついだと思われる内外の経書数千巻を以て、和気広世が延暦4年(785年)に文庫を開設し、大学の学生および諸儒の参考に資したことが日本後記にでている。私立の公開図書館であったと考えられる。但し、785年は正に長岡京への移転決定の翌年、平安時代の幕開けの時代であるが、当時奈良の都にこのような私的な動きがあったことは、我々に図書普及状況へのひとつの情報を与えてくれる。

(5) 寺院文庫

(イ) 経 蔵

寺院文庫の第一は経蔵で、一切経を収蔵する。すなわち内容は仏典のみで、その主目的は参照にはなく、むしろ礼拝の対象であり、寺院の装置の一種とみるべきものである。文字を知らぬ信者が経蔵の廻転式収納庫に納められた一切経を一廻転することによって、読経したと同じ供養を果たせるというものである。経蔵は南都七大寺(東大寺、興福寺、法華寺、唐招提寺、大安寺、西大寺、薬師寺)をはじめ有力寺院に次々と設置された。飛鳥時代、推古天皇32年(624年)の寺院数46、奈良時代のそれが700であることを考えるとき、経蔵のための写経の需要が巨大であったことが想像される。聖武天皇の天平13年、全国に国分寺、国分尼寺を置くことが決まったが、これら国分寺に置かれた経典は種類、数量共に大部のものではなく、経蔵を設けるほどではなかったから、安置所に安置されるに止まった。全国60有余の国分寺、30の国分尼寺に完全な経蔵を設けることは、一方で写経所の拡充が行われたけれど、急には不可能だったのである。¹⁰⁾

(ロ) 文 庫

一私人としての僧侶が、自分の勉強のためまたは愛蔵のために設けるもので、内外典を含む。

(イ) 学寮文庫

仏教の各教派ごとに僧侶養成機関として設けられた学寮に付属する図書室であるが、主として鎌倉時代以後に属するので、当面の対象にはならない。

(6) 公卿文庫・個人蔵書

聖武天皇の神亀7年(735年)帰着した遣唐使一行の僧玄昉は経論¹¹⁾常疏5000余巻を伝え、同時に帰国した吉備眞備は唐礼130巻、太衍曆1巻、太衍曆立成12巻、楽書要録10巻を将来し、太衍曆を朝廷に献上した。

写経所が玄昉から度々原典の借入れをしていることから見ると玄昉は将来した一切経を私蔵していたようだ。眞備が将来本をどれだけ私蔵したかは不明である。個人の蔵書として歴史に記録されている例としては、橘奈良麿が480余巻を所有したことが見えるほか、有名なのは石上宅嗣が蔵書数千巻をもって芸亭と名づけた公開図書館を開設し、本邦における公開図書館のはじまりと目されている事跡である。

以上見てきたとおり、諸文庫には仏典のみでなく儒教經典等、いわゆる外典もまた収蔵されている。とくに政府諸機関および官僚貴族養成のための官学、私塾等はその目的から当然に政治哲学としての儒教經典を多く備えていたと思われる。しかし、その量を考えるならば(5)の寺院関係における仏典の蔵書が寺院数と仏典の浩瀚さからいって圧倒的に多かった。それは、情報伝達が目的でなく、呪術のための用具であったから、情報伝達のニーズを超えて生産利用され得たのである。

注

- 1) 沢田吾一 『奈良朝時代民政經濟の数的研究』 富山房、1927年、143-153頁。
- 2) 青木和夫 『日本の歴史3 奈良の都』 中央公論社、1965年、23頁。
- 3) 同上、178頁。

- 4) サンソム 『日本文化史』, 61頁。
- 5) 青木和夫 前掲書, 283頁。
- 6) 木宮泰彦 『日華文化交流史』 富山房, 1955年, 157-159頁。
- 7) 同上, 158頁。
- 8) 小野則秋 『日本文庫史研究』 上巻, 大雅堂, 1944年。
- 9) 皆川完一 「光明皇后願經五月一日經の書写について」『日本古代史論集』 上巻, 吉川弘文館, 1962年, によれば, 「五月一日經」一切經書写の原典として用いられたのは, 玄昉の藏經であり, 写經所の写經請本帳（正倉院文書の一部として残る）は, 借用底本の目録である。

五月一日經は, 開元釈教録（唐の一切經目録）所収のすべてを書写することを企図したものであるが, 実際にはまだ将来していない經典もあり, そのすべてを盡していない。一方, 開元釈教録にない注釈書が加えられたから, 量的には, 中国撰述の最新目録を凌駕する, 約7000巻と想定される一切經となった。

当時の状況下では, 底本の蒐集は極めて困難であり, 多くの学僧等から原典を借用した様子が生々しく正倉院文書に記録されている。（皆川論文534-543頁）

- 10) 正倉院文書には, 南都各宗が, 写經所から經卷を借用したことを示すものが多数あり, 各宗は単に講読のためばかりでなく, 藏書整備のため, 書写を目的に借り出したものと考えられる。（皆川完一同上論文, 562頁）
- 11) 開元一切經と考えられている。

4 製 品

日本語表記法がまだ確立せず, 外国語としての漢文が文字コミュニケーションの唯一の手段であり, 印刷術と市場のメカニズムを欠いた飛鳥, 奈良時代において, 国立写經所を中心に生産された經典を製品として観る時, それはどのような内容, 特色を持ったものであったろうか。

先ず何よりも, この時代の主製品が全くすべて漢訳仏典, すなわち中国語訳された仏典のそのままの複製であったことである。

本稿では取上げる余裕がないが、日本でも次第に日本人（といっても多くは渡来系）の手に成る著作がつくられるようになる。しかしすでに見た通り飛鳥、奈良両時代を通じて、写経の大部分は仏典であり、しかも聖徳太子の三経義疏のような例外はあるものの、何よりも中国人の解釈をそのまま受け入れる形での複製であった。日本人の著作は、写本作りを社会的現象として見る限りまだ問題にならぬ程度の量でしかなかった。

外国製の文献をそのままに受け入れ、その解釈を疑うというよりは単純に読誦（復唱）をくり返すという形での受容を行ったのは、未開の古代王国が、圧倒的な大陸文明に接しての自然な帰結であった。

筆者はかねてから、文化は交流するが、文明は直流、浸透すると主張している。文化人類学的レベルで、各民族の持つ文化的特色は、国際的（というよりは正確には部族際的）な人々の接触をとおして交流し合うだろうが、高度な技術の優位性にもとづく文明の場合には、常に文明的に高圧の地域から低圧の地域へと浸透する。交流ではなく直流であるとするものである。¹⁾かつて人類は農業革命、精神革命等人類史のいろいろな段階を、各地域の主要文明が同時発生的に経験してきたが、近代科学革命のみは西洋が先行し、その西洋文明の強烈な影響下に、人類は過去300年を西洋優位の中に生きてきた。²⁾西洋文明の浸透であり、それは植民地支配という形をとった。国境というものが厳然と確立された近代におけるそうした文明の浸透は、武力支配を通して実現されていたが、近代国家以前では、文明の浸透は必ずしも武力支配を伴うことはなかった。武力支配することによる利益が必ずしも市場支配、資源確保といった基幹的な経済上のニーズをもった近代の場合のように大きくなかったからだろう。日本が島国で、簡単には武力支配できなかったことも大きかった。

もっとも中華思想のシナ王朝は、日本も服属する蛮族のひとつであるという姿勢を常に保とうとしたが、日本は日本で独立国のつもりであった。あいまいさが許されるところが、古代のおおらかさであり、東洋的な現実主義か

もしれない。

第二次世界大戦敗戦後、1965年の日韓条約締結に際し、日本は韓国に5億ドルを支払い、これは韓国の経済発展に対する協力金であるとの立場をとり、一方韓国側は、これを請求権にもとづく賠償金であるとの解釈をとったらし³⁾い。江戸時代の朝鮮通信使の上表文が間に立った対馬藩外事係によって、双方に都合のよいよう訳文を改ざんされたのと軌を一にしている⁴⁾。

ともあれ大陸文明（中国および朝鮮）の圧倒的な影響力の下に、この国の文化は次第に前進することになった。その時、大陸とくに半島からの渡来人が大きな役割を果たしたことは明らかである。というよりは、近代的な意味での国境意識もパスポートもなかった古代においては、人々は交通の許す限り自由に往来し、交流していたというのが実態だろう。交通の便の最も良かった半島から大量の朝鮮系の人々が渡来し、自然豊かなこの国土に住みついたことは当然で、大化改新後の律令体制の中でおこなわれた戸籍調査によっ⁵⁾ても明らかである。

このような飛鳥時代から奈良時代にかけてこの国に書物として存在したものには次のようなものが考えられる。

- (1) 大陸から将来（輸入）された漢籍、仏典
- (2) 日本人の著作
- (3) 大陸将来の書物や日本人の著作を日本人が書写したもの（日本に於いてであれ、留学生、留学僧が現地で書写したものであれ）

この中で(2)の日本人の著作がまだこの時代では大変限られたものであることはすでに述べた。(1)は我々の本稿の対象である写本生産のためのいわば原典となったものであるから、将来書の実態を知ることは、写本製品の中身を知ることでもある。

そこで記録を頼りに、遣隋使、遣唐使、渡来外国人の将来書、輸入書を見てみよう。

(1) 原典としての輸入書

大陸のすぐれた先進文明に接し、今日と同じく知的興味の旺盛であった古代日本人が、大陸文明の結実である書籍の入手に狂奔したであろうことは、容易に想像がつく。⁶⁾

飛鳥奈良の知識階級が手にしたのは、もっぱら中国の經典であり、それらは朝廷への使節団が将来献呈したもの、遣隋使、遣唐使とくに同行した留学生、留学僧が入手し持ち帰った書籍、遣唐使以外の民間船が将来した書籍であり、またそれらを日本において書写複製したものであった。

一体どれほどの書籍が将来されたのかを遣唐使の記録によって見てみよう。

遣唐使一行がいかに典籍の入手に熱心であったかは旧唐書等に中国側の記録として残っている。⁷⁾ いつの時代にも学者は文献の入手にすべてを忘れるものである。留学生、留学僧たちは、自ら苦心して探索し、書写し、あるいは乏しい学資を割いて購入したもので、しかも交通不便の時代にあつて、これらを運搬するには多大の労苦と犠牲を払ったに違いない。留学僧がしばしば従僧や行者数名を伴ったのは、写経を分担させたり、運搬するためであった。このように苦勞して将来したものであるから、内容は決してかき集めでなく、かなり精選されたものであり、日本に未だ伝えられたことのない新訳経巻とか、優れた著述、珍しい詩集といったものが多かった。だからこれらの将来書籍は、日本の文化の発展に大きなインパクトを与えたのである。⁸⁾

飛鳥時代の留学生、留学僧の将来品については文献が乏しくよくわかっていないが、日本書紀等の記録から、石田茂作氏は、飛鳥時代に伝来したものとして18部百数十巻を、また白鳳時代伝来のもので11部六百数十巻を表示している。⁹⁾ 奈良時代の留学生、留学僧では

吉備眞備 唐体130巻、曆書13巻

玄 昉 経論5000余巻

行 賀 聖教要文500余巻

がある。玄昉の経論5000余巻は開元一切経と目される。開元一切経は唐代に

なってから新訳された密教經典をふくんでおり、この經典の将来が日本における密教の興隆に影響を与えた。

また中国からの渡来僧も当然に多くの典籍を将来した。例えば756年に来朝した鑑真は、

大方廣仏花嚴經	80卷
大仏名經	16卷
金字大品經	1部
金字大集經	1部
南本涅槃經	1部40卷
四分律	1部60卷
法勵師四分疏	5本各10卷
他26点	160卷

という大量の書籍を持参している。¹⁰⁾

このような仏典将来の結果、奈良時代の日本に存在したと考えられる仏典で正倉院文書に記録の現れるもの2979点(部)を採集し、一切經諸目録との対比を行った石田茂作氏の¹¹⁾研究によれば、奈良時代一切經の部数とその内訳は次の通りである。

インド撰述	大乘經	440部	2125卷
	小乗經	294部	621卷
	大乘律	38部	49卷
	小乗律	69部	492卷
	大乘論	111部	535卷
	小乗論	41部	705卷
	經	61部	108卷
	秘 密	139部	249卷
	計	1193部	4884卷

シナ撰述	偽 經	40部	約74巻
	釋 經	256部	約1790巻
	釋 律	28部	約 199巻
	釋 論	117部	約1208巻
	雜	195部	約 947巻
	計	636部	約4218巻
	総 計	1829部	9102巻

残念ながら、石田氏は総採集点数2979部からどのようにして一切経1829部を析出したかのプロセスの説明をしていないが、要するに唐における新訳、研究の進行と共に一切経が拡大したこと、奈良時代末にはそれが1万点に近かったことを示している。

石田氏はさらに、新しい仏典名の正倉院文書における初出年代をたどることによって、奈良時代の写経に数回のピークが観察されること、それが玄昉の将来や遣唐使の帰国による新訳の伝来、また新羅僧の渡来等の動きと連動していることを分析している。さらに石田氏は、唐の新訳が早いものは7年以内に、多くは十数年内に日本に将来されているという興味ある事実を報告している。¹²⁾ やがて平安時代の9世紀はじめには、最澄、空海ら有名な入宋八家と呼ばれる留学僧たちがおびただしい量の書籍を持ち帰っているが、それは次の時代の話である。

(2) 製品写本の量的分析

大陸からもたらされた作品であれ、日本で日本人の手によって編纂された書物であれ、印刷という手段が定着していなかった飛鳥奈良時代においては、複製はすべて筆写に頼るしかなかった。

第1章で見たように、一切経をはじめとして、奈良時代の終わりまでには1万巻（すなわち1万種類）に及ぶ経巻が日本に将来され現存したとして、そうした種類数とは別にどれだけ多くの写本がそれらの原典から複製された

のであろうか。そうした書物複製の量的計測は、データの乏しいこの時代にあっては不可能だが、それを類推する方法を一、二試みてみよう。

第一は写本の生産記録である。奈良時代における写本の最大規模のものは一切経の筆写である。本邦最初の集団的仏典書写事業は、673年（天武元年）の川原寺における一切経書写である。¹³⁾この時代には一切経は2500巻ほどであったと推定される。一切経の巻数は、奈良時代中に新訳が加わり5330巻に達した。天武20年（673）から宝亀3年（772）の100年間に都合18回、延べ22部の一切経書写が朝廷によって行われたからこれだけで一部5000巻として10万巻、紙数にして150万枚をこえる量である。

このほか特定の經典だけを書写する企てが多数行われ、とくに大般若経600巻がしばしば書写された。寿岳文章氏は、正倉院文書に記された写経用色紙の生産記録にもとづいて、天平期中に500万枚（1巻平均15枚とすれば33万巻分）が写経に用いられたであろうと考えている。

第二は写経生の生産能力からの類推である。写経生は1日に8枚程度を書写のノルマとしていた。¹⁵⁾写経所の定員が50人であったから年間250日働くとすると、¹⁶⁾写経所の年間生産量は10万枚、1巻15枚とすると7000巻、20枚とすると5000巻ということになる。実際には一切経書写には臨時の写経生が召集されたし、国立写経所以外で官寺、貴族等の雇用する写経生があり、地方の国司の下にもまた書写能力をもつ人々がいたのだから、全体として年間に1万巻平均の生産力は優にあったと考えられる。奈良時代70年では、50—70万巻が生産されたとしても、理論的には十分可能な範囲である。

第三は当時の蔵書の実態である。飛鳥奈良時代の図書館（文庫）や個人蔵書についての定量的記録はほとんど見出されない。例えば平安時代の891年に成立した藤原佐世撰、日本国見在書目録は、当時日本にあった漢籍1580部、1万7000巻を採録しており、文徳実録の854年の条に石川河主父子の蔵書が数千巻あったと記しているが、¹⁷⁾それより100年ないし200年以前の状態をそこから推測することは無理である。

ひとつの方法は、奈良時代における文庫（図書館）のたぐいとその人的規模を可能な限り量的に観察することで、これはすでに第3章でみたところである。奈良時代の書物の複製はほとんど筆写だから、中央政府には写経所があったものの、諸寺、貴族等はその文庫や経蔵に蔵書するため、自ら写字生を使って生産に当たったはずであり、第3章でみた文庫や経蔵の存在自体が蔵書量と写本生産量を想像させるひとつの傍証となりうるのである。

以上この国で複製された經典の量を生産記録、生産能力および蔵書実態の3つの側面から観察して来た。定量的記録が限られているため、奈良時代にどれだけの量の經典が生産され利用されたかについて正確な数字を結論づけることは不可能だが、奈良時代70年を通して平均年間1万巻の生産能力があったとする筆者の立場からは、奈良時代を通じて、70万巻が生産されたことになる。一方寿岳文章氏は、天平期の写経用紙の生産量から、写経量33万巻と推定している。寿岳氏のいう天平期が奈良時代を意味するか否かは不明だが氏は別の箇所ですべて写経が次第に年間1万巻を超えるようになったと書いている。奈良時代全体とすれば、70万巻は妥当といえよう。

最後に点数（種類）についてはどうであろうか。一切経だけで5000巻を超え、日本国見在書目録（891年成立、藤原佐世撰）に登載するもの1580部、1万7000巻である。ただし見在書目録は平安時代のものだから、割引して、奈良時代の日本に存在した典籍の種類は、粗っぽく考えて、1万巻といえそうである。

この1万巻の中味がこの時代において圧倒的に仏典であったことは言うまでもないが、次にくる疑問は、一切経は別として、仏典の中のとくにどれが多く複製されたか、仏典における流行の問題である。

(3) 製品写本の内容

飛鳥時代についてはいうまでもなく、史料の比較的多い奈良時代についてもそこで生産された写経の内容による生産量の分析は不可能である。ただ断

片的な記録から、どのような仏典がより頻繁に書写されたか、という一般的な傾向はつかむことができる。

奈良時代の写経には3つのケースがあった。¹⁸⁾

(イ) 一切経

(ロ) 一括写経

(ハ) 特殊願経

である。一切経（あるいは大蔵経）は本来漢訳仏教聖典の集成を意味しており、奈良写経の原典となったのはまさにこの漢訳聖典であった。一切経にふくまれる仏教聖典は内容的に分類すると、

経蔵——シャカ自身が説いたと信ぜられる教え

律蔵——修行者、僧団の修学規定

論蔵——前二者についての注釈的研究

ということになり、時代を経るにつれて翻訳がすすみ、注釈が加えられた結果、次第に増加した。本邦最初の一切経書写である、川原寺の一切経では約2500巻であったが、奈良時代中期には5000巻を超すようになった。いわば公認された仏教聖典の集大成、全貌を示すものである。

一切経書写はすでに述べた通り、飛鳥時代の末673年の川原寺一切経の書写から奈良時代の終わりまでに、通算18回企てられ、22部が生産されたが、一部の総巻数5000巻以上という大部の作業であり、大事業であった。18回のうち8回は天皇、または皇族の発願であり、僧侶の発願によるもの3回、東大寺等寺院の発願4回、その他貴族等3回となっている。¹⁹⁾

これら一切経の写経は、それだけで通算10万巻を超える大量の製品となるが、実はそれ以外の一括写経や、特殊願経による写経のほうが多かった。²⁰⁾一括写経とは、同一の経典を数部まとめて書写生産することであり、特殊願経は写経の目的により、それにふさわしい仏典を選択的に書写することである。

国分寺に配置する金光明経などは、同じものを国分寺の数だけ多数必要としたから、一括写経されたのである。

特殊願經の対象として、くり返し書写された經典を寿岳氏の著書から引用しておこう。次のものである。²¹⁾

法華經

金光明最勝王經

華嚴經

²²⁾
大般若經

金剛般若經

能斷般若經

仁王般若經

般若心經

²³⁾
觀世音經

不空羂索經

諸觀世音經

²⁴⁾
梵網經

²⁵⁾
藥師經

²⁶⁾
阿彌陀經

²⁷⁾
理趣經

大仏頂陀羅尼經

隨求陀羅尼經

これらの經典が奈良時代の人々に信仰の対象としてとくに愛好された背景には、奈良仏教の一般的特性がある。

大屋徳城氏の所説を要約すると次のようになる。²⁸⁾

奈良時代においては人々の間に密教の影響が強く、彼らは罪惡を懺悔（悔^け過^か）し無垢浄光陀羅尼經の勧めにしたがって「陀羅尼」を念誦し、また書写すればその功德によって延命と招福が実現すると考えた。生命の危険と生活の苦勞に常にさらされていたこの時代の人々にとって、延命と招福のためには神仏に頼るしかなかったろうから、「悔過」に対する熱意は今日の我々の

想像を絶するものがあつたろう。

こうして「悔過」は、奈良時代を通じて、上は天皇から下は民間まで広く行われた宗教風俗もしくは宗教儀礼となった。そうした宗教風俗から、仏教は鎮護国家の国家仏教となったのである。

ここで陀羅尼とは、平凡社百科辞典によると、「サンスクリットのダーラーニの音訳で、漢訳では総持（一切のことを記憶して忘れない力）、能持（いろいろの善をよく保つ力）、能遮（いろいろの悪をよく退ける力）などとされる。本来陀羅尼は一種の記憶術だが、形式化された結果、呪と混同され、後には呪をすべて陀羅尼と呼ぶようになった。呪とは災厄を除くためのまじないの言葉、真言のことである。だから陀羅尼は翻訳せず、原典どおり音訳している。」とある。

仏典のなかには、陀羅尼經と名づけられるものと、名称は陀羅尼經でなくても陀羅尼をふくむものがあり、これらいずれもが写經の対象として多用された。すなわち写經とは、無垢淨光陀羅尼經の教えに従って陀羅尼を念誦し書写することで、功德を得ようとするものであり、したがって書写の対象とされたのは、多くは陀羅尼經とその他の陀羅尼をふくむ諸經なのである。

そうした諸經のうち金光明經（義淨訳では最勝王經とされたので、金光明最勝王經ともよばれる）は、35種もの陀羅尼を持っているので、奈良写經の²⁹⁾もっともポピュラーな対象となり王朝は護国の寺としての国分寺には、金光明經または最勝王經を、滅罪の寺としての国分尼寺には法華經を配置させ、五穀豊穰、国土安穩を祈願するため転読（抜き読み）させたのである。

こうして金光明經と法華經は、仁王經と共に、鎮護国家の三部經として愛用され、奈良時代を通じて、最も多く生産された。とくに金光明經の影響が大きく、その結果、奈良仏教は平面的、装飾的、律令国家擁護的色彩が濃厚になることを避けられず、しかもそうした写本の生産のために、奈良時代の³⁰⁾製紙のほとんどすべてを消費したのである。

いずれにせよ、以上の観察を通して、われわれは奈良時代の写經生産によ

って、どのような仏典がなんのために作られたかをはっきり知ることができ³¹⁾る。

(4) 製品写本の物的形態

奈良時代写経製品について、次にはその物的な実態を確認しなければならない。幸いこれまでの写経研究によって、そうした物的確認はかなり詳細に記述されている。それに出版の経済史を指向するわれわれにとって、出版技術史的あるいは文化史的には重要なそれら詳細は、必ずしも同じ様な重要性をもっていない。したがって、ここでは、この時代の写本が、本体はタテ1尺3寸(39.5センチ)ヨコ2尺3寸(69.5センチ)の手抄紙、毎張17字24行を書写したものを張り継ぎ、卷子本として軸と表紙を附して巻物に仕立てられたこと、1巻の平均は10ないし15張であったこと、紙は、産地、原料、色、染料、形状、用途、品質、加工過程の相違によって233もの異なる名称が付³²⁾されたほど多様であったことくらいを確認しておけば十分であろう。

注

- 1) 箕輪成男「国際コミュニケーションとしての出版」『外文出版』日本エディタースクール出版部、1993年。
- 2) 伊東俊太郎『比較文明』東京大学出版会、1985年。
- 3) 1992年9月、NHK テレビ放送による。
- 4) 田代和生『書き替えられた国書』中公新書、1983年、123-182頁。
- 5) 吉村武彦『古代王権の展開』集英社、1991年、118頁。
- 6) 木宮泰彦『日華文化交流史』196-197頁。
- 7) 旧唐書の倭国日本伝にはその短い本文中に留学生がある限りの金を投じて典籍を購入し持ち帰ったことなど、遣唐留学生等の動きがよく出ている。
『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』岩波文庫版、1956年、39頁。
- 8) 木宮泰彦 前掲書、197頁。
- 9) 石田茂作『写経より見たる奈良時代仏教の研究』東洋文庫、1930年、22-23

頁。

- 10) 木宮泰彦 前掲書, 198-199頁。
- 11) 石田茂作 前掲書, 6-7 頁。
- 12) 同上, 42-62頁。
- 13) 寿岳文章『日本の紙』142頁。
- 14) 同上, 148-149頁。
- 15) 同上, 173頁。
- 16) 同上, 172頁。
- 17) 小野則秋『日本文庫史』教育図書株式会社, 1942年, 55頁。
- 18) 寿岳文章 前掲書, 155頁。
- 19) 同上, 147-149頁の表による。
- 20) 同上, 151頁。
- 21) 同上, 151頁。
- 22) 般若とは、悟りにいたるための知恵であり、大乘仏教の最も基本的な原理である一切皆空の思想によって、悟りのための知恵を得ることを説いたのが般若経である。従って般若経こそ大乘仏教の中心的教説といってよい。諸説が加えられ大般若経は600巻もの大部のものとなった。それを要約したものが般若心経である。
- 23) 観世音は、衆生が現実生活において遭遇するあらゆる災難・苦難から、ただ観世音菩薩の名を唱えるだけで、即座に救ってくれる救世の権化として、大乘仏教において重要な存在。観世音菩薩が種々の姿（普門）をとって示現する様を三十三身と数え、そこから西国33箇所霊場等の33という数が出ている。
- 24) 僧侶の守るべき戒律を示した経。
- 25) 薬師は万病を治癒し、人の寿命を延ばすことを本願とする仏。日本では薬師寺建立に見られるよう、奈良時代以降、薬師信仰が盛んであった。延命に対する人々の願いの強さを反映している。密教時代に成立した薬師経（薬師七仏本願経）を書写、読誦し、また薬師悔過することが流行した。
- 26) 阿弥陀如来の名号を一心不乱に唱えれば、それだけですべての罪障を許され、浄土に往生することができるとする阿弥陀信仰は、古くから行われた。この教えを説く無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の三経を浄土三部経というが、その中でも、阿弥陀経は古今を通じ最も尊重された經典のひとつである。

- 27) 唐代に成立した般若經典のひとつ。「空」の思想に最終的解釈を与えようとするもの。真言宗では最もこれを重んじている。松長有慶『理趣經』中公文庫、1992年に詳しい。
- 28) 大屋徳城『寧楽刊經史』内外出版株式会社、1923年、9-19頁。
- 29) 町田甲一『大和古寺巡礼』講談社学術文庫、1989年、263頁に金光明經はとくに白鳳時代に流行したとある。
- 30) 寿岳文章 前掲書、147頁。
- 31) 石田茂作氏は、『写經より見たる奈良朝仏教の研究』第二編に於いて、正倉院文書に現れた寺院、僧侶間の写經の貸借記録を分析し、南都六宗各派の教学研究の性格、重視された主要註釈書の確認を行っている。奈良仏教の盛時における、各宗各派の研究活動が活発なものであったことは、前節(1)で見たように、唐からの新研究の導入が極めて迅速に行われたことからわかるが、それにもかかわらずトータルとしては、写經の生産は、実用よりは呪術のためであった。石田氏は、同書第三編において、写經所における經生と校生、装潢の人数の比率を分析し、奈良時代も後期になると、写經は実用から讚歎の手段へと転化し、装飾性を増す。天平15年には、經生に対する校生の率が最高になるが、天平勝宝4、5年には、校生の比率は半減し、代わって装潢が校生と伯仲するほどに増加しているという興味深い事実を報告している。(同書252頁)

5 著 者

前項「製品」で見たように、この時代に複製された經典はまず第一に仏典であり、付随的に儒教漢籍である。そのいずれにおいても、著者あるいは訳者が中国人や、中国化した西域人であったことはいうまでもない。パーリ語仏典の中国語訳に当たった有名な西域人、鳩摩羅什や安世高、中国人の玄奘や義浄といった人々の苦心の作を奈良時代人は無報酬で受け入れたわけで、この時代では、出版の経済的過程に、著者はまだ全くかかわるところがなかった。儒教等諸子百家の作品についても同じであり、後に別稿で見ることにな

る日本人の著作の場合でも変わらない。著訳者たちは、国家や国家仏教寺院の被護の下に生活を保証されて著述にあたったのであるか、あるいは作品が著者の確認さえも困難な遠い時代の古典であつたりで、いずれにせよ、作品の流通から、著述に要した実質的コストを回収するという観念は、まだまったく成立していなかったのである。

中国であれ日本であれ、著訳者たちを王朝（国家）は手厚く遇し、大きなコストを支出している。それらのコストが、かりにこの場合出版の経済環境過程に入りこまないとしても、出版の経済的背景を成す大きな要因として我々の関心外ではありえないが、奈良時代の出版がほとんどは写経による仏典の複製であり、仏典の中国語訳作業は中国で行われたものであることを考えれば、日本に関する限り、著者段階でのコストは無視して差支えないといえよう。

6 複製過程

奈良時代末期には、百万塔陀羅尼の大事業があり、そのほかにも版経の記録がみられるから、奈良末期には印刷技術が存在したと思われるが、既述のとおりこの時代を代表する「出版」活動は、印刷ではなく書写による経典の製作であつた。ここでは写経の複製がどのように行われたかを、経済的視点から考えることにしよう。

奈良時代の写経については、幸い正倉院文書に写経所の帳簿記録が何千点も残ったため、紙や用具の出納、写経生の待遇、勤務実態からかれらの家庭生活まで、かなり詳細に知ることができる。そこで正倉院文書や遺された奈良写経の現物調査から、奈良写経の物的な側面については、意外に研究が進んでいる。そうした研究の成果である諸著¹⁾に依拠しつつ、出版経済史的な観点から、複製過程を資材（紙）と複写（写経）の2点について以下に整理してみよう。書物の文化史・技術史を目ざすのではない本稿であるから、技術

的なデテイルについてはここでは触れない。

(1) 紙の生産

中国で写経が盛んに行われたのは、より多く口承に依存して釈迦の教を伝存したインドと違って、文字の国であり、古典を重んずる民族であったことと、同時に紙というすぐれた筆写材料を豊富に持っていたためである²⁾ということは、いうまでもない。その中国を経て仏教を学び、中国以上に紙に恵まれていた日本もまた、中国と同じく写経の国となった。

製紙の技術は、推古天皇18年(610年)に高句麗の僧、曇徴によって伝えられたとされるが、これは日本書紀の誤読であり、曇徴は絵具や紙、墨の製作にかけて達人であったというにすぎず、実際には曇徴来日以前の4、5世紀には大陸から紙がもたらされ、その後製紙法もまた、渡来人によって伝えられたと考えられる³⁾。

中国で紙の発明者とされる蔡倫が、紀元105年に、製紙法を発明したのではなく実はそれまでに存在した製紙法を改良、大成したに過ぎないように、曇徴もまた4、5世紀以来存在した日本の製紙に、技術的進歩をもたらした⁴⁾だけなのかもしれない。

いずれにせよ、われわれにとって大事なのは、製紙技術「導入」の時間的確定ではなく、製紙技術が社会的に果たした役割の実態のほうである。

奈良時代に用いられた紙にはどのようなものがあり、いつどれだけの量がどこで、誰によって生産されたのであろうか。飛鳥・奈良時代初期の製紙のメカニズムについては、寿岳文章氏が詳細な記述を行っている⁵⁾。これを我々の視点から整理してみると、このようなことになる。

- (イ) この時代の紙の使用者は、写経のためであれ、戸籍や官庁間の連絡(通課・報告)のためであれ、すべて政府、あるいは王朝貴族に限られており、一般庶民にかかわることがなかった。したがって、紙の生産自体はすべて官営の機構によって、政府目的のために行われた。

- (ロ) 大宝律令（702年）が散逸し、今日に伝わらないため当時の政府諸官庁の執務規定は不明であり、製紙関係のしくみについても不明である。
- (イ) 大化の改新による戸籍と計張（課税台帳）の作製は大量の紙を必要としたが、それらを高価な輸入紙によることは考えられないから、国産されたはずである。
- (ニ) それらの紙は、国府所在地またはその近傍で、中央政府図書寮の管轄下にある官営の製紙場で作られた。一方中央政府の製紙場では、中央政府の必要とする紙を作ると共に、造紙手を養成し、各国衙に供給した。逆に、各国衙から技術習得のため、中央の製紙場へ派遣される者もあった。
- (ホ) 図書寮管下の造紙所の人員は、9世紀後半に成立した「令集解」によれば、808年、これまで8人であった造紙手を5人に減らし、後さらに4人に改めており、これが「延喜式」（927年撰進）の規定する「4人」にひきつがれる。造紙所のほかに、農閑期に製紙をする紙戸が50戸あった。
- (ヘ) 飛鳥・奈良初期と延喜年間の間には200年のへだたりがあるが、技術的には大した変化はなかったと考えられる。延喜式により紙屋院に支給された備品、消耗品等の詳細がわかる。
- (ト) 造紙手1人の生産量は2尺3寸（69.5センチ）×1尺3寸（39.5センチ）の紙を年間5000枚（4人で2万枚、1人1日14枚弱）である。ただし中央政府に納める上の上質の紙を別として、通常紙を抄く場合、1日170枚程度を生産した。1日の生産量を170枚とすると、年間6万2000枚、それから中央政府のノルマ5000枚を除いた5万7000枚が、貴族階級によって用いられた分である。
- (チ) 紙を納めない諸国は、製紙原料（楮など）を納めている。それらは、近畿、中国、四国、九州から東海、出羽にまで及んでいる。

以上、寿岳文章氏の説く所により、我々は飛鳥、奈良時代の紙が、もっぱ

ら公の事業としての經典複製と文書記録のために、中央政府および、地方行政庁付属の官立製紙所において作られたことを知る。一部貴族の使用のために紙が売られることはあっても、紙の生産と流通は、きわめて官業的色彩の濃い形で行われたことになる。その際、個々の製紙所は極めて小規模であり、家内工業の域を出ない。したがって製品の標準化は進まず、製品は多様であった⁶⁾。幸い奈良時代における紙の1人当り生産量、生産従業者の処遇、そしてまた紙の価格を情報として得ている我々は、これを最終的に、經典のコスト計算に利用することができる。出版の経済史を意図する我々にとって、製紙の技術史的詳細は、ここでは不要である。

(2) 写経生産システム

たまたま奈良時代、写経所の記録が正倉院文書（神亀4年（727年）から宝亀11年（780年）に至る53年間の文書）に多く残されたことから、写経所の実態については多くの研究がなされて来た。石田茂作、福山敏男、寿岳文章氏らのそうした研究から、我々は奈良時代の写経活動を次のように概括することができる。

(イ) 写経機関

印刷と違って、大規模な製作設備を要しない写本製作であるから、基本的には書写能力を持った写字生がいさえすれば、写経は可能ということになる。だから、国家機関としての写経所のほかに、諸大寺、貴族もまた写経所を設け、地方官庁である国衙、郡衙でも必要に応じて写経を行ったし、写経所を設けるまでいかない貴族、豪族も、個々の写経は随時行ったであろう。寿岳氏は、石田、福山両氏の研究から、正倉院文書に現れる各種写経機関を整理し、24の写経所を示している⁷⁾。

これには中央政府の写経所、皇后宮職の写経所、藤原氏等有力貴族の写経所、東大寺、西大寺、大安寺等大寺の写経所、その他がふくまれ、特定的一切経願経を書写するために特設されたもの（完了後は統合、改廃された）特

定の經典（華嚴經、宝積經等）や注釈書（疏）を専門に写經するものがふくまれている。

これらかなり大がかりな公私の写經所のほかに、正倉院文書に登場しない地方の写經所や、小規模に行われた私人の写經を考えると、天平時代に生産された写經の量は、おそらく中世のどの時期のキリスト教国にも、これに比較できるものはないほど膨大なものであった。⁸⁾

(ロ) 写經機関の規模

前記各種写經所が、それぞれどれほどの人員を擁し生産に当たっていたかを、継続的、系統的、総括的に見るに足る情報を我々は持っていないが、正倉院文書に散見する個別ケースから、大体の様子は想像することができる。

先ず8世紀のはじめ、奈良遷都直後から編纂がはじまる養老律令の中で、職員令によって図書寮の官制が定められており、写書手20人が配置されている。（3章市場の項参照）この官制の写經師数は、その後定められた延喜式ではむしろ減少したりしているが、それは官制外の写經活動が盛んになったことと連動していると思われる。奈良時代における写經活動は、大屋氏のいう最盛期に向けて拡大していったので、次に正倉院文書に記録のある天平11年（739年）の写經司の人的構成は、

經 師 78人

装 潢 6人

校 正 10人

計94人

⁹⁾ となっており、次いで天平勝宝4年（752年）の写經所の構成は、

書 生 208人

内 写間經 21人

六十華嚴經 13人

写常疏 103人

写政所公文 12人

写間疏 51人

供奉礼仏 7人

遣使 1人

その他合わせて 392人

¹⁰⁾
となっている。

写経最盛期に写経所が大拡張をし、写経生の間に、写経内容の難易等によって、分業、階層化が生じているのを発見する。

さらに、正倉院文書から、天平時代を通じて写経所に働いた、600名を超す写経生の氏名がわかっている。¹¹⁾

もちろんこれら600人が同時に勤務していたわけではなく、正倉院文書のカバーする期間53年間にわたって分散しているのだから、上記天平勝宝4年の写経所定員208人と大体符合するといっていよう。

写経機関として最大の国立「写経所」が、その盛時に約200人もの写経生を抱えていたわけで、すでに見たその他の写経所は、それよりはるかに小規模としても、奈良時代の末期には、写経を仕事とする人々が社会全体でかなり多数であったと思われる。奈良時代の官僚人員を約1万人と推定した我々だが、その1割1000人くらいが、写経生ないしは写字によって生活していた人々ではないかと考えられる。

¹²⁾ (i) 写経所の業務分担

写経所には、長官とその下に史生、舎人等管理業務を担当する者が若干名いた。人事、写経料紙、筆墨、給料、食事その他、写経にかかわる一切の事務が彼らによって取り扱われた。

写経の実務に従ったのは、

- (a) 経 師——前項で見たように、次第に専門分化を遂げるようになるが、本文写経にあたる人々である。経師は、諸官庁の事務職員の中から能筆の者を選んで任命したもので、採用に際しては試字と称する採用試験を課した。写経はこのように、厳正で美しく筆写することに力

を注いだ。写経師の多くが渡来人またはその子孫であり、書風に中国様¹³⁾が示されているといわれる。

(b) 校 正——校正に従事する者。三校までも校正を重ね、厳密を期した。

(c) 装^{そう}潢^{こう}師——製本係である。用紙にケイを引き、書写された用紙をはりつぎ、校正がすんだ後、製本する。製本はもちろん卷子本である。

(d) 題 師——製本済の經典に経名を書き入れる役。特に能筆のものが選ばれた。西洋写本のルブリケーターに当る。

(e) 瑩^{えい} 生^{しょう}——金字経の場合、金泥で写経するには紙面が平滑であることを要した。猪の牙で紙面をみがく職人を瑩生と呼び、装潢師の一部である。

などであるが、写経が盛んになるに従って、一層専門分化が進み、紐、帙、軸、箋などの職工、絵かきなどが特化してくる。

(二) 作業能率

経師の作業ノルマについては、延喜式が詳細に規定している¹⁴⁾。

季節による日の長短に従って、大字の場合1日1700字、1500字、1300字、小字の場合、1日2300字、2000字、1700字である。また麻紙を使う場合には、上の穀紙の場合から、各々100字ずつ減らし、注釈書の場合は、2000字、1800字、1600字、それを麻紙に写す場合、100字ずつ減らすといった、こまかな規定がある。製本係のノルマについても、仕事の内容によってこまかい規定がある。紙をはり継ぐだけなら600枚、界線を引くだけなら300枚、紙を折って光沢を出し、書き易くするだけなら200枚がノルマである。さらに特別な染紙を扱う場合には、つぎ張り1日200枚などと規定されている。延喜式の成立は10世紀であるから、奈良時代の実態をそのまま反映するわけではないが、極端な違いはなかったろう。

経師は日給や月給でなく、出来高払い制であり、1日の平均生産量は、正倉院文書の具体例から逆算すると8枚程度であった。写経師をふくむ各種工

程の出来高賃金は、次のとおりである。¹⁵⁾

本文写経	1 張	5 文
註疏つき本文	1 張	7 文
標題のみ	1 卷	2 文
結願文のみ	1 帳	2 文
校正(校正係)	5 帳	1 文
装潢(製本係)	2 張	1 文
瑩生	1 帳	2 文

写経手当ては、困難な内容のものほど料率が高くなっている。寿岳氏は、写経生の日給が40文にしかならず、これに対して製本係の方は、1日100文になったとの計算を示している。記録に残っている具体的な例で検証してみると、天平勝宝年間に、東大寺が大般若経600巻の写経を行ったが、これに要したのは、

紙	1万2208合
経師	専属30人他で、延2477人
兎毛筆	1本で150枚を写す
鹿毛筆	1本で600枚の界線を描く
墨	1本で300枚を写す

となっている。¹⁶⁾これによれば、写経生1日の生産量は5枚程度、1巻平均20枚ということになり、平均1日8枚、1巻平均15枚程度という既出の数字と比較して、著しくくいちがうところはない。

(六) 経師らの生活

写経師たちは、写経所に泊まりこみで、2、3か月という長期間継続勤務した。日の出とともに起き、夜勤までふくめて十数時間も働き、食事は朝夕2回、1日4000字弱を写経した。下級官吏としての経師たちに、昇進の機会は40年に6回だけ、貴族階級とは全く差別されたシステムの下で借金に苦しみ、時には借金苦からの逃亡者まで出し、しばしば病気に悩みながら、仕事

をした様が正倉院文書の記録から復元¹⁷⁾されている。

注

1) 例えば、

寿岳文章『日本の紙』。

大屋徳城『写経』。

小野則秋『日本文庫史研究』。

柴原永遠男「経師たちの生活」『天平の時代』日本の歴史 4 巻，集英社，1991年，233頁以下。

石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』。

2) 大山仁快編『写経』至文堂，1979年，20頁。

3) 町田誠之『大和古寺巡礼』16頁。

4) 寿岳文章 前掲書，22頁。

寿岳文章氏は、曇徴の来朝以前に、すでに日本で紙を作った者がいたとしても、それは、推古朝を去ることあまり遠い年代のことではなかったろうと推定している。もし古い時代から製紙が行われていたとすれば、仁徳朝以来440年間の日本の各種工芸の実態にゆたかな側面光を投げかけている万葉集に、紙抄きをほのめかす言葉が出てくるはずだが、それが全く見られないのは、推古以前には製紙工芸が普及しておらず、奈良朝となっても官営事業として行われ、一般人の生活感情の中へしみこんでいなかったからではないかという。

5) 同上，30-103頁。

6) 寿岳文章氏は正倉院文書に現れた紙の種類を233種としている。それらの名称は原料，産地，色相，染料，形状，用途，品質，加工過程，等によってつけられたものである。

7) 同上，155-163頁。

福山敏男氏は24の写経機関名は同一機関が次々に発展的に名称を変えたものであると主張している。「奈良期に於ける写経所に関する研究」『史学雑誌』43巻12号，1932年。

8) 寿岳文章 前掲書，163-164頁。

寿岳氏は、上の箇所では、こうした「量」にもかかわらず、それは壬申の乱以来天武系の皇族に相ついで起こったあさましい権力争奪、それが原因でいくたびか崩壊の危機を迎えた、律令国家の面子を保つためのいわばセメント塗りの役割を果たしたのみで、仏陀の教えが当時の人々の生活に浸透したわけではなかったと、評している。

9) 同上, 156頁。

10) 小野則秋 前掲書, 163-164頁。

11) 小林善八『日本出版文化史』青裳堂, 1978年(復刊), 16-20頁。

12) 小野則秋 前掲書, 161頁。

13) 同上, 162頁。

14) 同上, 59頁。

15) 寿岳文章 前掲書, 168-169頁,

16) 小林善八 前掲書, 21-22頁。

17) 栄原永遠男 前掲書, 233-242頁。

ここで栄原氏は、経師の平均1日の出来高を4000字弱としている。

7 価格・コスト, 賃金

飛鳥奈良時代に主として国家機関によって作られた経典は、前述のとおり国家の官給品として、諸大寺、国分寺、各級官庁等に配られたのであり、販売されたのではないから、価格が付されることはなかった。したがってここでの問題は、そうした経典の製作に一体どれほどの経費(原価)がかかり、それを一体誰がどのように支出したかである。ここで正倉院文書等からの情報を総合すると、次のことが明らかである。

- (1) 経典1巻の平均的長さは、10ないし15帳である。ここに15帳とは、タテ約40センチ、ヨコ約70センチの手抄き紙を次々に15枚はり合わせることを意味し、写経生が書写し、校正係が校正を完了した単葉を、製本係が次々にはりつぎ、軸と表装をほどこして、経巻として完成するのである。

表2 15帳から成る經典1巻の原価

1	本文紙代	2文×15=30文	
2	写経代	本文5文(1帳当り賃料)×15=75文	
3	校正代	1文(5帳当り賃料)× $\frac{15}{5}$ =3文	
4	製本代	1文(2帳当り賃料)× $\frac{15}{2}$ =7.5文	
5	瑩生	2文(1帳当り賃料)×15=30文	
6	筆, 墨, 製本用資材, 本文以外の筆写割増賃料等のコストを1~5の20%とすると	29.5文	
		計	175文
7	間接的製造諸原価		125文
		総計	1巻 300文

(2) 本文用紙1枚の値段は2文である。¹⁾

(3) 写経生等に支払われる賃率は、それぞれわかっている。(表2)

そこでかりに15帳から成る經典1巻の生産コストを計算してみると、表2のとおり175文となる。これはいわば直接製造原価であって、これに、写経所施設の維持管理費、雑役係の人件費、写経生をふくむ写経所職員の食事代、水道光熱費等、間接的製造原価を加えなければならない。表2では間接的製造原価をかりに125文として、総計300文と計算した。しかし実際には間接的製造原価とさらに一般管理費の部分がこうした推定よりもかなり大きかったのではないと思われる。

幸いこのような写経のコストについては、個々のケースの予算案が、正倉院文書に30通ほど残されている。天平宝字6年(762年)の大般若経2部1200巻の場合、その予算額は、958貫675文、決算額1028貫213文となっているから、1巻当り850文である。²⁾各経巻の長さは、大体似たようなものであるから、この数字は、経巻すべての平均的コストとして利用できる。

問題はこの850文が、経済的にどのような重さをもった金額であったかである。

最もわかり易いのは、写経生の収入との比較である。幸い、写経生の収入はわかっている。1日8枚程度の製造ノルマであつたらしいから、5文×8、40文が1日の日当である。月に25日働くとして、月に1000文（すなわち1貫文）、年収12貫文ということになる。この写経生が、妻と子1人、3人家族とすれば、1人当り年間所得は4貫文である。³⁾

いま、1巻のコストは850文であるから、年間所得に対して21パーセントという大きな比率になる。

写経生が、もし、一切の衣食住の経費をかけず経典だけを買おうとしても、1年に5巻しか買えないことを意味する。いいかえれば、今日、日本人の1人当たりの国民所得300万円として、その21パーセント63万円が1巻のコストということである。

筆者はかつて、各国における書籍の平均価格と平均所得とを比較し、その比率を書籍に対する経済的アクセス率として、分析したことがある。⁴⁾今日、日本は世界で最も経済的アクセスのよい国、すなわち本の購入が最も容易な国のひとつであり、平均して、1冊は、所得の0.15パーセント、ペーパーバックだけを取り上げれば、0.028パーセントという低率である。その際、最もアクセス率の悪い例として、インドが例外的に3.69という数字を示したが、我が日本も、奈良時代には、今日のインドのさらに数倍も高い率であつたことがわかる。経典がいかに貴重品で、庶民に縁のないものであつたかということでもある。

しかも、写経生という下級官僚ではあつても、当時のインテリ層に属する人々にとってアクセス不能であつたのだから、国民の大部分を占めた農民にとって、それは全く宝物そのものであつたろう。⁵⁾

さて我々は、経典1巻のコストが850文、今日の実感でいうなら1巻63万円もしたことを発見した。したがって経典は極めて貴重品であり、庶民の入手はあり得ないことがわかった。逆に言えば、入手、所蔵できたのは、諸大寺、官庁、一部貴族等に限られたのである。こうして、奈良時代の書籍、す

なわち經典の一巻一巻が、当時としては大変大きなコストをかけた貴重品であったとして、それを大量に製作した出版者、ここでは中央政府や諸大寺にとって、そのための出費が財政的にどのような意味をもつものであったかが、次に明らかにされねばならない。

細川亀市氏はその『日本上代仏教の経済⁶⁾』において、奈良時代における国家と寺院の写本製作を巨大な浪費と断じ、その背景にある荘園経営の意味を論じたが、本当に写本製作は、国家の財政を危うくする種類のものではあったのだろうか。

先ず第一に、奈良時代における年間出版量であるが、我々はすでにそれを「製品」の項で、約1万点とおさえた。時には1万点を超す生産があったと思われるが、ここでは簡略化して年産1万巻⁷⁾としよう。

我々はすでに1巻のコストを知っているから、1万巻のコストは、850万文と計算できる。すなわち8500貫であり米にして2300石分である。

次に、奈良時代における政府歳入のデータが必要だが、これについては沢田吾一氏が多分に推測を交えつつも中央政府の収入として年額80万石を提唱している。この数字を採用すれば、前記2300石相当の写経コストは、政府歳入の約0.3パーセントということになる。今日では国立大学を中心とする100校近い国立学校の経費が、政府歳入の約1.8パーセント、また義務教育課程のための教科書無償給与が0.07パーセントであることを考えると、写経コストの0.3パーセントは小さいとはいえない支出である。一国の出版支出の経済的ウェイトをはかるもう一つの方法は、国民総生産に対する負担率を見ることである。

すでに見てきたように、奈良時代末の水田面積から、年の収穫を600万石とし、その他の生産活動を加えてその2倍の1200万石相当額を国民総生産⁸⁾ととらえれば、筆者のいう書籍産業比率は、1200万石分の2300石すなわち約0.02パーセントとなる。

一国の総生産、あるいは総支出のなかで、書籍に対してどれだけ国民が支

出しているかを示すこの比率は、今日の世界では、途上国から先進国まで、かなり近い数字（0.2—0.4パーセント）を示している。歴史的に古い時代には低く、近代化とともに高くなっているから、今日にくらべて10分の1以下である奈良時代の0.02パーセントは、妥当な数字かも知れない。もっともここにいたる計算の中には、かなりの推測が入っている。かりに、年間生産量を多目に見て2万巻とすると、総コストは1.7万貫、書籍産業比率は0.04パーセントとなる。

筆者はかねて、1907年におけるイギリスの書籍産業比率を0.059パーセントと報告している。¹⁰⁾これに比べて0.045パーセントは決して低いとはいえない数字である。奈良時代における写経事業が、奈良王朝にかなりの負担であったといえるだろう。しかしそれを、平城都城の造営、諸官大寺や国分寺、国分尼寺の創建、大仏鑄造といった巨大事業に比べるならば、はるかにそのウエイトは小さいものであったに違いない。¹¹⁾

注

- 1) 寿岳文章『日本の紙』、170頁。
- 2) この間の事情は、弥永貞三編『日本経済史大系 1 古代』第三章、吉田孝「写経事業の財政」『律令時代の交易』第四節および沢田吾一『奈良朝時代民政経済の数的研究』、586-599頁に詳しい。
- 3) ここでは、写経生一家の1人当り所得を考えるのに、銭4貫文とした。当時米1石の価格は3.7貫文であったから、4貫文は米1.1石ほどに当る。この数字が妥当と思われるのは、平安初期成立の倭名類聚抄によれば、当時の全国の水田面積は76万余町歩であったという。（平安末期の人口を伝える『峯相記』や『拾芥抄』については、弥永貞三『日本古代社会経済史研究』岩波書店、1980年第10章が詳しい。ちなみに『拾芥抄』は約93万町、『峯相記』は約94万町としている。）奈良時代にはそれより少しく小さかったとして60万町歩と見ると、当時1反歩の米の生産高は1石であったから、60万町歩の米生産高は600万石、600万人といわれる奈良時代の人口1人につき1石である。

戦前、日本人は年に1人1石の米を食べるといわれた（今日では勿論はるかに少ない）から、これで大体計算は合うことになる。ただし、米以外の計算がここでは無視されることになるが、米が経済の中心であったことを考えると、大体の図式を想像するためには、ここでの計算は著しく不当ではないといえそうだ。ただし、年に1人1石を食べる写経生一家が3人家族で4石弱しか収入がないことは、家計の苦しさを物語っている。『日本の歴史』（集英社）の「経師たちの生活」が如実にそれを示している。もっとも写経生たちは、作業中は写経所に泊まり込みで、食事と制服を支給されたのだから、年4石でも生活できたのだろうか。

- 4) 箕輪成男『歴史としての出版』弓立社、1983年、150頁。
- 5) 筆者はまた、日本における書籍価格の歴史的推移を分析し、米価との比較をしている。そこでの発見は、書籍価格と米価の相対的關係は極めて安定的で、17世紀以来、学術書は1冊米6—10kg分、啓蒙書は2—3kgの範囲に納まっているということであった。

いま、奈良時代の経典1巻の値を850文とすると、当時の米価1斗、370文から計算し、850文は約2斗3升、32kgに相当する。奈良時代という1200年前においては、学術書1冊（巻）の米価は10kgという枠から若干外れていることがわかる。

勿論、米のもつ家計費における価値は、時代と共に次第に低落するのだが、奈良時代においては米が極めて貴重だったから、ここでの32kgの米は、禁止的な値段を意味している。沢田吾一氏は、『奈良朝時代民政経済の数的研究』（富山房）において、農具の価格について筆者と同じ比較分析を行い、奈良時代と現代のそれが、米量に於いて近似的であることを論じている。

- 6) 細川亀市『日本上代仏教の社会経済』白揚社、1931年、9-13頁。
- 7) 寿岳文章 前掲書、197頁。
- 8) 沢田吾一 前掲書、718-731頁。
- 9) 箕輪成男 前掲書、59-87頁。
- 10) 同上、67頁。
- 11) 栄原永遠男によれば（『天平の時代』、99頁および281頁）たとえば、各地の国分寺創建のために地方豪族から提供された寄進で内容のわかるものに次のようなものがある。

伊予国分寺 米1560石

銀2440丁，田10町

尾張国分寺 米1000石

紀伊国分寺 米200石

美濃国分寺 米400石

また官位を買うために献物をした例（『続日本紀』に見える）として、錢1000貫（米にして300石ほど）から2000貫（600石）のほかに米200石程度の献物を多くの豪族がしている。これらの拠出を日本全体で見れば、極めて多額であったろう。しかし国費の大半を消耗し、国民生活を破壊し、律令体制を破局に導いたとされる東大寺の造営はじめ、他の巨大な支出の前には焼石に水で、政府は、錢貨発行収入を確保したり、売位、売官で収入をはかり備蓄米まで食いつくして財政を湖塗したのである。

そうした財政崩壊の中で、写経支出の与えた影響は、他の巨大浪費に比べれば、相対的なものであったろう。

8 流 通

国家事業として、官立の複製所（写経所）で生産された経典は、政府の計画に基づいて、受取機関である諸大寺、国分寺、官庁、学校、貴族等の経蔵、文庫に給せられたもので、販売されることはなかった。

また、諸大寺等が生産した経典は、自寺の経蔵を充実するための自家生産であったから、そこでも当然に経典の流通問題は起こらなかった。

しかし一方で、773年に芸亭を開設した石上宅嗣と、弘文院の基礎を作った和気清麿など、貴族とはいえ個人的に蔵書拡充に努めた人々は、どのようにしてそれらの典籍を入手したのであろうか。歴史はその間の事情を明らかにしていないが、恐らくこれらの知識人貴族は、購入するのではなく、自ら筆写複製したであろうと思われる。写経生を雇って複製させたわけで、機械的な大量生産でない一品生産のこの時代には、生産従事者（この場合には写経生）を自ら雇う自家生産は、効率的に、専業の生産所、例えば官立の写経

所に比べて、劣るわけではなかったからである。

9 比較出版経済

人類はいかなる民族においても、一定の作品を複製、流通させることによって、情報伝達を果たすという、「出版」の機能を、古い時代から行って来た。

各民族は、そのおかれた自然的、社会的環境に支配されつつ、独自の複製、流通方式を編み出してきたのであって、広義の出版システムのあり方は、当然に多様である。一方出版という営みを、社会の近代化と大衆社会の成立にともなって発生した、いわゆる近代的出版と、狭い意味に捉えることもできる。その場合、出版の発展の程度は、各社会の近代化の進展の度合と密接にかかわっていることを、筆者自身報告して来た¹⁾。

筆者はそうした歴史的分析から出発し、次には逆に、一国の社会が営む出版活動の総体を、いくつかの経済的指標を使いマクロで捉えることによって、諸国の出版活動を比較し、その相対的優劣、問題点の所在、改善の方向を明らかにすることを提唱した²⁾。

提唱された出版経済の方程式は、

$$ABC = EFG$$

$$H = \frac{BC}{E}$$

$$J = \frac{E}{B}$$

A：人口

B：1人当り所得

C：書籍支出率

E：書籍の平均定価

F：1点当り平均部数

- G：年間出版点数
 H：1人当り購入冊数
 J：書籍への経済的アクセス率

である。

残念ながら各国における統計データの不備から、ここに用いた6個の基本的指標の数字は、ほとんどの国、ほとんどの時代において正確に得られないが、この方程式自体は、すべての国、すべての時代にあてはまる出版経済構造の図式化だから、たとえ一部を推測値で埋めるとしても、この方程式を基礎において考えることによって、各国出版の特徴が示されることになる。

いま本稿で飛鳥、奈良時代という古代の「出版」活動を考えるに当たっても、この方程式にあてはめてみることは、有効と思われる。すなわち出版経済の方程式は、異なる国、社会の共時的比較にも、同一国の時系列的比較にも、ともに有効だからである。

いま、本稿で、これまでに確認してきた奈良時代の諸データを、方程式にあてはめ、それを今日と比較することによって、奈良時代「出版」の特徴に迫ってみよう。

ここで、年間総生産部数として2万巻をとれば

- A：奈良時代の人口 600万人
 B：1人当り年間所得 7.4貫文（1石=3.7貫としたので国民総生産は米1200万石分）
 C：書籍支出率 0.04パーセント
 E：1冊当り平均価格 850文
 F：1点当り平均部数 2（一切経の5000巻など多様性があるのでかりに年間2万巻を1万種、1種類2巻とした）
 G：出版点数 1万

であるから

$$ABC = EFG$$

$$600万 \times 7.4貫 \times 0.0004 \div 0.85貫 \times 2 \times 10.000$$

$$H（1人当り購入冊数） = \frac{7.4貫 \times 0.0004}{0.85貫} = 0.0035冊$$

$$J（経済的アクセス率） = \frac{0.85貫}{7.4貫} = 0.115$$

これから言えることは、

- (1) 書籍支出率、0.04パーセントは、既述のとおり、古代としては低い数字ではない。王朝の写経事業が国家に過重な負担をかけたことを示しているといえよう。ただし、0.04パーセントの数字は、多分に推測にすぎない。
- (2) 1冊当り平均定価850文は、正に禁止的なコストである。一般市民の所得に対する経済的なアクセス度は、11.5パーセントを示している。これは、今日の日本の100倍も高い率である。
- (3) 1人あたり購入冊数は、0.0035冊と計算され、ほとんど一般市民と無縁であったことを示している。国民は平均して300年に1冊しか手にし得ない計算である。これは国民の大部分が文盲であったこと、経典が必ずしも読むためでなく、呪術的活動として生産されたことも反映している。
- (4) 総出版点数1万点、同一経典複製数、平均2巻というのは、写経の特徴を示している。多部数の同時複製を原則とする印刷では、平均部数ははるかに高く、したがって、もし同じ資金を使って、印刷方式で複製したら、出版経済の方程式から言って、点数のほうかはるかに少なく止まったろう。筆写複製であるからこそ、これだけ多様な経巻を生産できたのであり、まだ読書人口の大きくない社会においては、筆写のほうが経済的に有利であり、可能性をもっていることを示している。
- (5) 奈良時代と現代の出版経済を、上記諸指標によって比較して来たが、それをまとめると次のとおりである。

	奈良時代	現 代 (1970年)
A：人口	6 百万	110百万
B：1 人当り年間所得	7.4貫文	50万円
C：書籍支出率	0.04%	0.4
E：平均定価	850文	660円
F：1 点当り平均部数	2 冊	9,000冊
G：出版点数	10,000点	36,000点
H：1 人当り購入冊数	0.0035冊	3 冊
J：経済的アクセス率	11.5	0.132

ここで試みているのは、概念的模式図を描き比較することであるので、基礎の数字は丸めてある。また最も問題があるのは、現代の出版点数を3万6000点、平均部数を9000部とした点である。ここでの出版点数は新刊のみでなく、重版点数もふくめて考えられている。ただ、正確な重版点数が報告されていないため、1970年の新刊点数1万8754点にそれと同じくらい重版点数があるものとして、合計3万6000点としたのである。この年の実売総額2200億³⁾円と、総冊数3億3000万冊及び、平均単価は確定数字であるので、もし3万6000点とすれば、1点当り平均部数は約9000部となる。もし重版回数が極めて多く、新重版合わせて5万5000点とすれば、1点当りは6000部となる計算である。一般的に言って、1点当り平均が9000部、6000部という数字は、かなり高すぎるように思われる。その点は、将来確認を要する問題として残しつつ、ここでは出版経済の方程式を満足させるためにかりにこうしておいた。

もうひとつの問題は、この1点あたり部数を、ここでは出版即売上部数として扱っていることである。出版したものが、すべてその年度内に売れるのでないことは明らかだし、実売数の中には、前年以前刊の在庫の売上が入ってくる。ここではそうしたことを差引きして、点数については、その年の新重版点数をとり、売上額では、年度内新重版書の次期以後繰延分と、旧刊在

庫売上を相殺して単純化している。

注

- 1) 箕輪成男『情報としての出版』、『歴史としての出版』、『情報としての出版』、『国際コミュニケーションとしての出版』
- 2) 箕輪成男「出版開発」『国際コミュニケーションとしての出版』日本エディタースクール出版部、1993年所収。
- 3) 平均単価は、この三者の数字を満足させるために660円とした。「新文化」編集部編『出版統計小事典』1978年版によると、平均定価は「年報」の計算で538円となっており、25パーセントほどくいちがっている。他の2者の数字を採用した「年鑑」からは、総平均価格の報告がない。このくいちがいは、異なる源泉からの数字を組合わせた結果と考えられる。

10 あとがき

出版史を「書かれた本」の精神史としてあとづけるのではなく、それを生み出した社会経済的背景の側から捉える立場で、筆者はこれまでいくつかの試論を発表してきた。本稿もまたその一環であり、いずれ完成させるべき日本出版経済史の、いわば前史にあたる部分である。

文字通り「版」を用いない奈良写経は、出版というにふさわしくないが、パブリッシュの原義に立ち返って、一定の作品を複製頒布することと定義するならば、それは正に出版の原点に位置していると見ることができる。

全般的に資料の不足から、おおくの推測を交える作業となったが、一方で、奈良時代は正倉院文書の存在により、他のいかなる時代よりも精確な歴史研究が行われている時代でもある。歴史家でない筆者がここで試みているのは、奈良時代の写経生産について詳細な史実の記載をすることではなく、マクロに見て、出版経済史の立場から一定のイメージをつかむことであり、その目

的のためには、細かい数字よりは、大づかみな推測・推定に重点をおいた。したがって引用文献に於いても、極めて学問的な諸著と同時に、多くの、より一般読者向けの書物をも自由に利用している。